

超次元ゲームネプ
テューヌ 古の守護者
(ガーディアン)

ゆでゆで

注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

あらすじ

その日、少年は呪った

平和だった日々を壊した存在を。

そして何より、

守らなければならなかったものを何一つ守れなかった自分自身を。己の非力さを。

荒れ果て、面影をなくした大地を涙で濡れた瞳で眺めながら、

少年は誓った

もう、2度と同じ過ちは繰り返さないと…

こんな自分に「ありがとう」とお礼を述べ、次の次元へ（・・・）送り届けてくれた彼女の思いを無駄にしないために：

誠に勝手ながら、前のものを一度削除して、また投稿することにしました。お気に入り登録して下さっていた方、読んで下さっていた方々、誠に申し訳ありませんでした m

（ m

中身は変わっていないのですが、タグの内容を変更しました。こんなダメで豆腐メンタルな作者ですが、また読んで頂けるととても嬉しいですよ!!

目次

第0話	プロローグ	1
主人公紹介		4
第1話	見知らぬ場所に落とされて	10
:		
第2話	見知らぬ場所で目が覚めて	14

第0話 プロローグ

その日、少年は呪った

平和だった日々を壊した存在を。

そして何より、

守らなければならなかったものを何一つ守れなかった自分自身を。己の無力さを。

荒れ果て、面影をなくした大地を涙で濡れた瞳で眺めながら、

少年は誓った

もう、2度と同じ過ちは繰り返さないと：

こんな自分に「ありがとう」とお礼を述べ、次の次元へ（・・・）送り届けてくれた彼女の思いを無駄にしないために：

一方、滅んでいく大地の中でただ一人、仰向けで倒れている少女がいた。その少女の名はモルガナ。少年を送り届けた人物であり、この時代の女神でもあった。

しかし、彼女の治めた国の面影は今やどこにも残っていない。今、彼女の目に写っているのは、変わり果ててしまったかつて自分の治めていた国だった場所と、天高く登っていく一筋の光のみだった。

その光を見つめながら、モルガナはおもむろに口を開いた。

「あーあ、僕の国もこれで終わりかあ……何であんな奴に国と民を奪われなきやいけないのかなあ〜」

悔しそうに、そして、とても詰まらなきように彼女は呟いた。

「あの子には悪いことしちゃったかな。ま、いつかあ〜、伝えたいことは伝えたい。どこまで飛んでくのかは自分でも分かんないけど、少なくともこのままここに残って欲しくはなかったからねえ〜。残ったら絶対アイツにきつかわれそうだし……」

ひとしきり呟いた後、遠ざかっていく光の中にいるであろう人物に、モルガナは笑顔で呟いた。

「バイバイ、どこまで行くのかは分かんないけど、そっちでもいっぱい人助けしてね。」

そして最後に

「さよなら……『アポロ』」。

私の守護者（ガーディアン）……」

別れの挨拶と少年の名、この物語の主人公の名を呟いた。

最後の言葉を言い終えると、満足したように地面に身を任せ、これから自らに訪れるであろうものを受け入れる為に目を閉じた。

しかし、

「え……………」

『それ』は訪れることは無かった。

その代わりに、彼女を突然光が包み込み始めた。自分でも予期していなかった突然の事態に混乱し、思わず声を挙げてしまう。

そんな彼女の事などお構い無しとでもいうように、その光はどんどん彼女を包み込んでいった。

「……………」

そんな事態に最初こそ驚いていたものの、光の中に何とも言えぬ暖かいものを感じ、次第にその光に身を委ねていった。

やがて彼女を完全に包み込んだその光は、何でも無かったかのように、彼女を包み込んだまま、静かに消えていった……

それから月日が経ち、新たな国が建国された。

『タリ』という国が…

彼女の言っていた、『アイツ』の国が建国されたのだった。

主人公紹介

・アポロ

本作の主人公。年齢は17歳。

元々は古の次元で国を治めていた女神の1守護者《ガーディアン》を勤めていた。後にタリの女神となる人物との争いで敗北してしまいが、重症を負っていたモルガナの最後の力で遠い次元へと送り届けられた。

・守護者となった経緯

幼い頃に母を亡くし、父と共に家計を支えるためにクエストをこなしていた。ある日のクエスト中にモンスターに囲まれているモルガナを偶然発見し、撃退。その力をモルガナに見初められ、自分のところに来ないかと誘われたのが切っ掛け。

当初はなるつもりは無かったのだが、孤児院の経営者であり、冒険者でもあった父親が死亡し、父の「1人でも多くの人を助ける」という理想を受け継ぎ、実行するための方法を自分なりに模索した結果、以前モルガナのところに来ないかと誘われていた事を思い出し、女神のところに行けば国の状態が直ぐに分かる上、受け継いだ理想を实

行できると考え、女神の下へ行くことを決めた。

また、I『守護者《ガーディアン》』は職業ではなく、彼の活躍が次第に評判になっていき、国民が彼が常に女神の下に居ることを知った為、アポロのみの称号という形で授けられたもの。

・容姿、性格等

顔立ちは、整つてはいるが幼さが若干残っている。

髪の色は茶髪だったのだが、父の死のショックで

髪の毛全体が白くなってしまっている。

髪の長さは、肩に掛かるか掛からないか位。

性格は明るく、普段は優しい口調だが、キレると別人のように豹変する。

一人称は「俺」

服装は、基本的には甚平か袴で居ることが多かったが、女神の下で働くようになってからは、白のシャツ（ワイシャツに近い）にトレンチコート、灰色のダメージジーンズ、茶色のレースアップブーツで活動するようになった。

ゲームギョウカイに来てからは、女神の下にいたときの格好で居ることが多くなる。

趣味は読書と音楽鑑賞、歌うこと

好きなものは誰かの笑顔、楽しい事

嫌いなものは誰かが泣いているのを見ることがと

誰かを傷つけること、または傷つけられること

戦闘スタイルは双剣による高速戦闘

・使用武器 挿絵募集中

主武装 閃剣

両刃の剣で、色は銀。

副武装には、普段は袖の中に入っている自作の仕込み短刀がある。

・技

紫電—〇〇式

1〜50式まである。

1〜5式 自身の身体能力や武器の威力、切れ味の向上をもたらす効果。

数字が上がるごとに持続時間や切れ味、威力の向上効果は増していく。

6〜10式 味方の身体能力や武器の威力、切れ味の向上をもたらす効果。数字

が上がるごとに持続時間や切れ味、威力の向上時間が増していく。

11～14式 相手に麻痺属性の状態異常をもたらす。数字が上がるとに麻痺させる時間が長くなる。

15式 妙技。雷による残像を作り出す。

16～20式 相手に雷属性の魔法による攻撃を行う。数字が上がるとに威力と攻撃範囲が広がるが、それに伴って消費する魔力の量も増加する。

21～24式 自分の一定範囲内に雷属性の防御魔法を

展開する。数字が上がるとに範囲と耐久性が増すが、それに伴って消費する魔力の量も増加する。

25式 自分自身に球体状の雷のバリアを作り出し身を守る。一定時間の経過や、一定以上のダメージを受けない限りは解除されない。

26～29式 味方の一定範囲内に雷属性の防御魔法を展開する。数字が上がるとに範囲と耐久性が増すが、それに伴って消費する魔力の量も増加する。

30式 味方全体に球体状の雷のバリアを作り出し身を守らせる。一定時間の経過や、一定以上のダメージを受けない限りは解除されない。

31～35式 自身の武器に雷を纏わせ、攻撃範囲の増加や雷による追撃効果が付与される。数字が上がるとに攻撃範囲と追撃回数が増加するが、魔力も著しく消費する。

36く40式 味方の武器に雷を纏わせ、攻撃範囲の増加や雷による追撃効果が付与される。数字が上がることにより攻撃範囲と追撃回数が増加するが、発動者の魔力も著しく消費する。

41く44式 光と雷で武器を作り出し、装備する。武器の種類は様々で、数字が上がるごとに威力も増していく。但し、使用中は魔力を徐々に消費していき、数字が増えると減少していく量も増える。

45式 秘技。自身の体を雷化させ攻撃を回避し、相手の死角へ移動する。使用には魔力を半分消費する。

46式 奥義。相手を雷の檻に閉じ込め、四方から雷撃を加え、最後に雷で強化された武器で一閃する。発動には7割の魔力を消費する上、魔力の残量に伴って威力も変化する。

47式 2つ目の奥義。雷でできた無数の小剣と共に相手を攻撃。八つ裂きにする。その後、雷撃による追撃を発生させる。発動には魔力を半分消費する。

48式 秘奥義。自身に雷を纏わせ、一撃を加えると同時に纏わせた雷を相手に全て流し込む。絶大な威力を発揮するが、魔力が7割以上残っていないと発動できない。使用後は自身にも反動が出る。

49式 2つ目の秘奥義。雷を纏わせた武器で光速で連撃を加えてでき

た傷口から、雷撃による追撃を発生させる。その後、麻痺効果のある状態異常を与える。魔力を7割消費する上、魔力の残量によっては、追撃が発生しない、状態異常が起きない等のデメリットもある。

50式 最終奥義（究極奥義ともいう）。雷の鎧を全身に纏う。攻撃は素手だけでなく、専用の武器でも行える。更に、攻撃する毎に大威力の雷撃で追撃を発生させる効果が付与される。発動には、残った魔力を全て消費する必要があり、魔力残量によって持続時間が変わってくる。また、発動後は使用者の体も損傷を受ける。

出会った場所に。そして、俺とぼちが家族になった場所に…

「でも、やっぱり何か違うね…」

そういえば、あの時モルガナが言ってたっけなく。

『次の次元に送り届ける』って。もしかして此処がそうなのかな？だとしたら俺はやっぱり、国も、モルガナも守れなかったのかな…

「アポロさん… ……?」

「つと、悲観的になっちゃいけないね！モルガナがお礼を言ってくれて、笑顔で送り出してくれたんだから頑張らないと!!」

ぼちを心配させないためにも、悲観的になつていた自分に渴を入れる。そうだ、モルガナの為にも頑張ろう!!

「先ずはこの光から出てみよう。でも、どうやって出よう?つか、これどんな原理で浮いてるんだ?うーむ… …… 分からん。」

この光から出る方法を模索していた、そんな時だった。

スウツ

「むむむ… ……ふえ?」

今まで俺とぼちを包んでいた光が突然消えた。突然の出来事に驚き、変な声が出てしまった。しかもここは上空。それもかなり高い。そんなところで今まで自分達を

見つかりませんでした☆

ドゴオオオオオオン!!

盛大に地面に激突する。更に……………

「アポロさ〜ん」

「っ、ててて……………。えっ?」

ぼちが俺の後から落ちてきた。小さくて軽かったから、空気抵抗でも受けたのかな? 理由はともかく、落ちてきた。着地点は、多分俺のお腹の上。

普段なら普通に受け止められるのだが、いくら小さくて軽いといっても、あの高さから落ちてきたら重さは少なくとも倍以上になるわけで……………

「ぐえ!」

それを腹にもろに食らった俺は、受け止められる訳もなく、残った空気が全て押し出される。同時に、この一撃で今まで繋いでいた俺の意識が飛んだ。ぼちに悪気があった訳ではないので許すけど…

第2話

見知らぬ場所で目が覚めて

—ネプギア side—

私は今、アイエフさん、コンパさんと一緒に、バーチャフォレストのモンスタ討伐の依頼をこなしているところです。依頼は簡単なもので、スライヌが増えた為規定数減らしてほしいというものでした。

「はっーやあー！」

最後のスライヌを倒し終え、依頼終了です!!

「ふう、依頼終了。お疲れ様です!!アイエフさん、コンパさん！」

私は側にいる2人に労いの言葉をかけた。

「ありがとう。ネプギアもお疲れ様！」

「お疲れ様です。ギアちゃん！」

2人もそれぞれ言葉を返し、後は依頼終了の知らせを依頼者にするだけとなり、帰路に着いていたときに『それ』は起こりました。

「ん?あれ、何です?」

ふいに、空を見上げながらコンパさんがそんなことを言ったので、私たちも見てみる

と……

「何だろう…？アイエフさんは分かりますか？」

上空にあったのは、何かの光でした。アイエフさんに聞いてみると、

「私も分からないわ。何かしら？」

アイエフさんにも分からないようで、首をかしげていましたが、よく見てみると、中に何かがいるように見えました。

「人……と… もうひとつ何かある？」

私には人影のようなものと、もうひとつ何かがあるように見えました。すると、
「えっ!!」

突然光が消え、中にいた『何か』が落ちてきました！

「何か落ちてきたです!!」

コンパさんもそれに気付き、声を上げました。

中から落ちてきたのは多分人です。いや、確実に人ですね！だって、悲鳴あげてるし!!そして、そのままその『人』と『何か』は地面に吸い込まれるように落ちていきました。

「な、何で人が!!」

「とにかく、行ってみましょう!!」

訳が分かりませんでした、アイエフさんの言葉に従い、その場所に向かうことにしました。

凄いい音がここまで聞こえてきたけど、大丈夫なのかなあ？

落ちたのはここから少し進んだ辺り。進んでいくと、声が聞こえてきました。

「すみませ〜ん。誰かいますか〜？いないなら〜、いないって言つて下さ〜い」

声は、のんびりしたような口調でした。私はその声に気が抜けてしまいました。あ、2人も同じだったようです。というか、誰も居なかつたら返事できないんじゃない？

行つてみると、そこは大分開けていて、真ん中辺りで地面に大きな窪みを作つて倒れている人を発見しました。周りに危険が無いことを確認して近づいてみると、その人は気絶してしまっていました。あれ？じゃああれは誰が？

そんなことを思っている内に、後ろから声が

「いました〜！」

え!? 誰!? 声のした方を振り向いてみると、そこに居たのは……………

「あの〜、ぼちの家族を〜、助けてもらつてもいいですか〜？」

とても小さな狸が2足で立っている姿でした。その姿を見た瞬間、私とコンパさんは

「か、可愛い…」

「可愛い狸さんです〜！」

「っ?!?!」

思わず声に出さずにはいられませんでした。

アイエフさんも、声には出していませんが、そう思っているみたいで顔を赤くして見えていました。

「?あの、アポロさんを、助けて欲しいです。」

「…………… えっ!?!あ、あの人のこと?」

暫く惚けていた私は我に帰り、慌てて問いかける。

「はい、アポロさんは、ぼちの大事な家族なので、絶対助けて欲しいです。」

「それはいいんだけど、あなたたち、どうしてあの光の中にいたの?」

小さな狸さんのお願いを聞き入れた後で、アイエフさんが問いかける。

「ぼちにも、よく分かりませ〜ん。気付いたら〜あの中にいました〜」

どうやら本人にもよく分からない様子。これじゃ、この人も原因は分からないのかな。あ、あと、この子の名前はぼちって言うみたいですね。何だか名付ける動物違う気がするけど、可愛いので許します!可愛いのは正義なんです!

とりあえず、ぼちとこの人を1度協会に連れていくことにしてこの場をあとにしました。それにしても、ぼちくん?ぼちちゃん?も可愛いけど、私と近い年くらいのこの人もすごく綺麗な顔してる。羨ましいなあ…

— side out —

— プラネテューヌの協会 —

(ここ、何処だろう?)

この世界に来てから2回目となる言葉と共に俺は目を覚ました。あれ?俺の記憶が正しければあの森にいるはずだよな?何でこんなところに?天国?え、俺まさか死んじゃった?家族の手で葬られちゃった!?俺の死因、まさかのぼちの頭突きなの!?

等と、1人で勝手にパニックに陥っていると、ドアが開き、女の子が入ってきた。桜色の長い髪が目立つ、同じ年くらいの女の子だった。第一印象は

「可愛い…」

「えっ!?あ、ありがとう…(ぎざいます…)。」

「え!?こ、声出てた!」

「は、はい……。」

やっちゃった… or z

何してんだ俺……

「えっと、ごめん!」

「い、いえ。それより、目が覚めて良かったです!良かったね!ぼち!!」

すると、女の子の後ろからぼちが出てきた。

「アポロさ〜ん!」

トテトテと俺のいるベッドまで来て飛び付いてくるぼち。それを受け止めながら、何とか俺は状況を理解した。そして、どうやってかは分からないけど、ここまで俺とぼちを運んできてくれたのであろう目の前の女の子にお礼を言う。

「ありがとう。君のお陰で俺もぼちも助かったよ」

「あ、いえ、そんな!私だけじゃなくて、アイエフさんやコンパさんも居ましたから!それに、放っておくわけにもいきませんし!!」

「とつても優しい方々でぼちは嬉しかったです。」

「そつか〜。良かったな〜ぼち〜!あ、そうだ「ネプギア〜?様子はどうか?」ん?」

「あ!お姉ちゃん!」

入ってきたのは目の前の女の子と同じ桜色の短めの髪で、活発な印象を与える女の子だった。ん?今、この子、『お姉ちゃん』っていった?妹にしか見えなだけで……

「あ〜!今、私の方が妹っぽいつて思ったでしよ〜!」

心読まれました……

「す、すいません。いや、でもホントにそうとしか見えなかったの……背も小さいし……」

「ねぶう!?!それはちよつと気にしてるんだよ!」

「ネプ子、もう少し静かにできないの？こつちまで聞こえてくるんだけど」

今度は茶髪で長い髪の毛の左側だけおさげのようにしている気の強そうな印象を放つ女の子と、

「ねぷねぷどうしたんです？」

独特なしゃべり方が目立つ女の子が入ってきた。それにしても、ここにいるのって全員女の子なんだ。何か居づらいな。

「あ、目が覚めたのね！良かった！」

気の強そうな女の子が笑いかけながら話す。その表情に思わずドキツとしてしまうが、なるべく平静を装って答えた。

「あ、はい。ありがとうございます！あ、名前教えなきゃですね！俺はアポロです。で、こつちの狸がぼち！」

「ぼちで〜す。」

「この度は、本当にありがとうございます！ありがとうございました！」

「いやいや、それほどでも〜」

「…あなたは何もしてないでしょうが、ネプ子：..」

「アハハ…：あ、自己紹介ありがとうございます！私はネプギア！よろしくね！」

そんなやり取りを見て苦笑いを浮かべていた、桜色の長髪の少女はネプギアと言うら

しい。珍しい名前だなく。

「騒がしくしちやつてごめんなさいね？ 私はアイエフ。諜報部所属よ。よろしくね！」
「コンパと言います。よろしくです！」

「コンパはプラネテューヌのナースで、あなたの手当てをしてくれたのもコンパよ。」

気の強そうな印象だった女の子はアイエフと名乗り、その隣の独特のしゃべり方の女の子—コンパが自分の手当てをしたのだと説明してくれた。

「そしてそして—！ 私はネプテューヌ！ ネプギアの姉で—、この国、プラネテューヌの女神だよ！！ よろしく—！」

元氣すぎるこの少女はネプテューヌといい、この国の女神らしい。ん？

「女神？ 誰が？」

「私が！」

「…………… まじで……………？」

「本当と書いてマジだよ—！ どーだ！ 驚いたか—！」

嘘だろ…………… この人が女神？ いやでも、人は見かけによらないって言うし、実は凄い仕事ができる人なのかも…

「驚くのも無理はないわ。誰だって最初はそう思うわよ。ま、女神と言っても仕事しないで一日中ゲームしてるぐうたら女神なんだけどね」

